



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 632 回 日本人はどこへ向かう？

2015.6.7

「私の国では日本を褒めると袋叩きに合います。」

—あなたはどこの国の人ですか？—

「韓国人です。」

「私の国も日本を褒めると袋叩きに合います。」

—あなたはどこの国の人ですか？—

「中国人です。」

「私の国でも日本を褒めると袋叩きに合います。」

—あなたはどこの国の人ですか？—

「日本人です。」

有名なエスニック・ジョークの一幕である。

いつしか日本には「自虐史観」が定着し、悪いのはすべて日本、謝罪して回るのが当たり前となった。

自国を声高に自慢し、民族のプライドを誇示することは許されない。新聞社やそれをベースにするテレビ等マスコミ、そこで飯を食うタレント評論家は、そんなこと言ったらこの世界から抹殺される。

平和を維持し戦争は絶対反対、有事のためのリスクに備える事すら許さない。

現実を見ようとしない、頭のいいお坊ちゃんたちの「マジック・ワード」が常套手段となった日本。

宗教、民族の血の争いもなく、国境を意識しない小さな島国が、国防への備えをしないまま、70年間平和を享受し続けた結果、見事な「平和ボケ」が出来上がったといえる。

「自分で何もやらなかったから、攻められれば謝るしかない」…自虐史観誕生の発端となった。

常識となった日本でのこの光景は、やはり、世界の見識から見れば、実に不思議な現実映る。

今期、安倍政権がチャレンジしている国会論戦は、ある意味、歴史的転換を目論む意図が伺える。

マスコミは当然認めず、検証もしないまま、むしろ反安倍報道を築き上げようと必死である。

日本だけ鎖国状態で繁栄できる時代ならまだしも、政治・外交・経済全てが世界の情勢と連携し、影響を受けざるを得ない現代社会では、自国だけの持論でことが治まるはずがない。

手を汚さず、汗はかかず…それは人任せ。口先のみで「ただ『反戦』だけを唱える日本人が無責任に思えた」…とは、目の前の戦場で活躍する、報道写真家の長倉洋海氏の本音である。

いま世界中から日本人に求められているのは、謝罪ではない、力強い「行動」である。

そして、「名誉と独立を好む国民はすべて、自国の平和と安全は自分自身の剣によることを意識すべきである」…とは、オットー・フォン・ビスマルクの言葉であり、ドイツ人の精神的支柱になっている。

今現実の日本人が、アジアをはじめとした世界中の期待に対し、一体、何ができるのだろうか？

国益を維持しながら、今日の日本は、何を成すべきなのか？

その答えを世界中に向けて発信しない限り、国際的足並みから徐々遠ざかることも、悲しいかな、現実のようである。しかもややこしいのは、そうなることを望んでいる国もある事、明確なる真実である。

「本当の勇気とは、日常の場合に、迫害や死を恐れず、自分の信念を吐露しうる気力と行動であろう」

…とは、確か、海音寺潮五郎氏の信念である。

国際社会における日本の立場を維持するために…日本人はどこへ向かうのか？

もう、言葉遊びの論議や評論は止めて、現実の世界に目を向けるべきである。